悉刊
AIRHEAD
DOROTHY
VOL.1

# 悪救済ドロシー **ADAMHEAD DOROTHY ANOTHER**

大間九郎 Ohma Crow

私は穴の中にいた。
どこまでも続く横穴、足には鎖を巻かれ、つるはしを手に今日も穴を掘る。
穴の中は薄暗く、生暖かく、臭い。
今日は生理なので股から血が垂れお腹が痛い。でも穴を掘ることを止めると燃える鉄の棒で背中を焼かれるので、休むことはできない。
内ももが血でぬるぬると気持ち悪い。
服を着たのは二年前が最後で、あの日から私の体を〝足を繋ぐ鎖〟以外何も包んではくれない。
今日も穴を掘る。
穴を掘らなければ、殺されるからだ。

◆◆◆◆

　私の産まれた村は街から遠く、蕎麦とヤクと山肌から取れる塩で生活していた。
　夏は山の上までヤクを連れて行き、草を食べさせる。
　冬はヤクと共に体を寄せ合い、寒さをしのぐ。
　男たちは塩を取り、女たちは蕎麦を育て、子供たちはヤクの世話をする。
　食べることに困るほど貧しくはないが、好きに物が買えるほど裕福ではない。
　どこにでもある村、それが私の産まれた村だ。
　父は村で蕎麦を挽く仕事をしていた。蕎麦を水車で挽き粉にする。粉にすると、蕎麦の量は減ったように見える、だから粉を挽く父は村で嫌われていた。
　でも父はいつも言っていた。
「私の仕事は必要な仕事。粉になった蕎麦と、実のままの蕎麦では売れる時の値段が違う。嫌われてもいいのさ、村が安泰ならそれでいい」
　私は父の誠実な人柄と、村を愛する、人を愛する心根が好きだった。

　村は九月にウーダンダンの祭りをする。
　着飾った十三歳の女が、着飾った十三歳の男たちに向けてウーと高い声を上げながら腹を見せる。
　男たちは靴を脱ぎ、素足で焼けた炭に塩を撒いた上に立ち、ダンダンと足を踏み鳴らす。
　村の人間達はそれを見て酒を飲み歌う。子供たちは祭りの最後に出る餅を楽しみに、女の子は腹を見せ、男の子は素足になり、祭りの模写をおこない大人たちを笑わせる。
　最後にヤクをバラしみんなで食べる。
　十三歳の男と女は気に入った者同士、同じ器で生まれて初めて酒を飲む。
　べつにこの時結婚相手を決めなくちゃいけないわけじゃないし、そもそも十三歳の人間がその年いないことだってあるから、前倒しで十二歳の男が踊ったり、三年連続同じ女が踊ったりもするので、ただの祭りだ。
　でもみんなウーダンダンを待ってる。一年に一度、気兼ねなく騒いで、好きなだけお酒が飲める日だからだ。
　私は十一歳で初めてウーダンダンの祭りで踊り、
それからすぐに軍服を着た人間たちが村を訪れみんなを捕え、馬車に乗せこの穴に連れてきた。
　みんな服を剥ぎ取られ、
足を鎖で繋がれ、
つるはしを渡され、穴を掘らされた。
刃向う人間は殺された。私の父も、母も、兄も、村長も殺された。
　私は殺されたくなかったし、村のみんなも殺されたくないって思ったのだろう、無言でつるは

しを持ち、穴を掘った。
　朝起きてつるはしを持ち穴を掘る。水が入った甕が出され、グチャグチャな餌が出されそれを食べるとまた掘る。また餌が出され、それを食べるとつるはしを置き眠る。軍服を着た男たちが手に燃えた鉄の棒を持って現れるとみんな起きて、つるはしを持ち穴を掘る。
　七百二十二回繰り返した日常。
　村のみんなはいっぱい死んで、でも次から次へと人が連れてこられるから、穴の中の人間がいなくなることはない。
　どんなに辛くても穴を掘る毎日。何も変わらない辛い辛い毎日。
　それが今の私の毎日だ。

　甕にコップを入れ、水を掬い股にかける。器を餌の中に突っ込み掬う。
　土の上に座り、手で餌を掬い食べる。
　ハエが纏わりついてくるから手で払い、餌を食べる。
　たまに考えてしまうことがある。
　私はなぜ産まれてきたのか？　なぜここにいるのか？
　なぜ生きているのか？　なぜ死を選ばないのか？

　なぜ穴を掘っているのか？

　少し考えて、でもすぐに考えるのを止めて餌を食べる。
　考えても答えは出ないし、考えても救われない。
　何も変わらないなら、考えて苦しむ分だけ損だ。
　餌を食べて器を返し、つるはしを持ちまた穴を掘る。
　何も考えず、つるはしを振り上げ、固い土に叩きつける。
　何も考えず、目の前の石を砕き、少しでも前に進む。
　穴を掘ることでしか、生きることが許されないから、穴を掘ろうと思う。
　私は死にたくない。

◆◆◆◆

　穴を掘っていると、横で穴を掘っている男が踏む足音がウーダンダンのダンダンに似ていて、私は男が踏む足音に合わせ「ウー」と声を上げてしまう。
　小さく、軍人たちに聞こえないように、「ウー」と声を上げると男がダンダンと足を踏み鳴らす。
「ウー」
　ダンダン。
「ウー」
　ダンダン。
「ウー」
　ダンダン。
　私の横で男がつるはしを振り上げ、私もつるはしを振り上げ、二人だけでウーダンダンをする。
　横の男はウーダンダンを知っているのだろうか？　それともたまたま足音がウーダンダンに似ているだけだろうか？　私と同じ村から連れてこられた人なのだろうか？　分からないが私は彼とウーダンダンをする。
「ウー」
　ダンダン。
「ウー」
　ダンダン。
「ウー」
　ダンダン。

　不意に私の目尻から涙がこぼれる。

　生きていることの悲しみが、私を冬の雪崩のように襲う。

　ヤクの首筋の臭いが、春に食べる新芽の苦みが、母が作ってくれたヨーグルトの酸っぱさが、父がお茶に入れる塩の甘さが、寒いとき、家族全員が裸で布団に包まり、私はいつも母と兄に挟まれ、兄の足の間に手を入れさせてもらった。触れる兄の体はいつも熱くて、母の体はいつも柔らかくて、兄の顎からはいつも春の草の臭いがした。
　死んでいった家族は、いつも私を包んでくれていた。
　村も家族のように、私を包んでくれていた。私はいつも包まれていた。
　その全てが、私の元から奪い去られ、

私は今、何からも包まれていない。

私は「ウー」と小さく声を上げる。
彼はダンダンと足を踏み鳴らす。
死んだはずの心が「ウー」と声を上げる。
死んだはずの村がダンダンと足を踏み鳴らす。
「ウー」
もうやめて、もう踏み鳴らさないで、もう死んでいる村なら、私を揺さぶらないで。
ダンダン。
やめて、もう声を上げないで、死んだ心なら、もう私を支配しないで。
「ウー」
やめて。
ダンダン。
やめて。
私は涙を流す。
やめて。
私はつるはしを振り上げる。
やめて。
私は踏み鳴らされる足音に合わせ、「ウー」と声を上げる。
私の心はバラバラで、ウーダンダンを求める心と、もう悲しみたくない心がぶつかって、ギリギリ音を立てる。
唇を噛んで声を上げないように、
つるはしを振り上げて声を上げないように、
目を瞑って声を上げないようにして、
でも耳に入るダンダンに喉が鳴ってしまう。
「……」
ダンダン。
「……」
ダンダン。
「……」
ダンダン。
私はここに連れてこられて初めて、死にたいと思った。
生きていることを恥ずかしいと思った。
死にたいけど、臆病な私の体は死ぬことを拒んで、つるはしを振り上げ穴を掘った。
私は死ねない自分を恥じた。

あれからどれくらい穴を掘っていたのだろう。唇を噛んだ血は乾き、でも涙は枯れずにあふれ

続けていた。
　もうダンダンと踏み鳴らす足音は聞こえないが、耳の中で一度蘇った悲しみは、容易に私を放してくれなかった。
　だから涙は止まらなかった。
　頭の中でどうすれば死ねるかだけを考える。
　どのような死が一番苦痛がないかだけを考えている。
　そんな時、
「もう、授かり神楽は踊らねーのか？」
　と後ろから声をかけられた。

◆◆◆◆

　黒いマントを頭からかぶった男がリンゴを食べていた。
小さい男、ここに来てすぐ殺された兄が十三で、その兄と同じくらいの体つき。
フードで顔が見えないけど、リンゴを食べる口元は、兄ぐらい幼く感じた。
リンゴを見るなんていつ以来だろう？　村は貧しくて、でもリンゴはあった。リンゴの木が村長の家にあって、実がつくと、子供たちを集め村長がみんなに分けてくれたのを思い出した。
「おいもう踊らねーのかって聞いてんだよ糞虫」
　プッ、男はかじったリンゴの欠片を吐きかけてくる。私は無視する。
「もう踊らねーのかよって聞いてんだよ!!」
　リンゴを投げつけられる。無視し、つるはしを振り上げる。
「なんだよオメーそれで俺のこと殺すつもりかコラ！」
　男は何を勘違いしたのか、オドオドしながら後ずさる。
　私はそれも無視して、固い土に、つるはしを突き立てる。
　男はキョトンとして、
「びべべビビらしてんじゃねーよ！」
　と叫び、背中をドン！と蹴られ、固い土の壁に倒れる。
　私は立ち上がりつるはしを持ち穴を掘ろうとするとまた男に蹴られて、土の壁にぶつかり倒れる。
　起ち上がる。
　男に蹴られ転ぶ。
　起ち上がる。
　蹴られる。
　これを何度も繰り返すうちに起つのがめんどくさくなり、蹴られるままにしていると、男のフードから覗く口元が笑っていて、この人もう当初の目的忘れてるな、蹴るの楽しんでるな、でももういいかこの人がこんなに楽しんでるならいくら蹴られても関係ないかって気になるがやはり痛いので体を丸めていると男の人がぜえぜえ肩で息をしだして大して蹴っていないのにもう息が上がってるのかよ、蹴る力もだんだん弱くなってて全然痛くないんだけど、いやそれより足が上がらなくなってきてるし、もう蹴れてないでしょ？　つま先当ててるだけでしょ？　もう顔笑ってなくて涎と鼻水凄いけど大丈夫？って感じの所で男の体力が限界値みたいでいきなり反転しゲロを吐いた。
　ケロケロケロケロケロケロケロケロ。
　男が口を袖で拭いながら私を睨みつける。
「こんなんで勝ったと思うなよ！　今日は体調の問題が問題なんだかんな！」
　と叫んでもう一度吐いた。

　見てられないので立ち上がり近くの甕から両水を手で掬い男の口元に運ぶ。
　男は私の手で掬った水に鼻先を埋め、ぐびぐびぐびと喉を鳴らして飲み干す。
　そしてもう一度吐いた。
「大丈夫？」
「これで勝ったと思うなよ！」
「そこに座って」
「うるせー！　殺すぞ糞虫！」
　男に肩を貸し壁際まで運び座らせる。
「水まだいる？」
「いらねーよ！　当初から求めてねーよ！」
「背中擦る？」
「さわんなよ！　クソが！」
　私は男の背中を摩る。
「急に気持ち悪くなることってあるよね、大丈夫だよ」
「大丈夫だよ、じゃねーよ！　殺すぞ！」
「お水飲んで」
「いらねーよ！　死ねよ！」
「飲んで」
「いら」
「飲んで」
「い」
「飲んで」
　静かになり男が水を飲んでくれて、落ち着いたのでまた背中を摩る。
　男はコホコホと咳をして、それでも傲慢な表情で顎を出し、私の目を見る。
「あんま舐めんなよ糞袋、俺は何でも分かるんだからな！　さっきの授かり神楽だろ？　お前山の出だろうが！」
「授かり神楽って分からないけど、山の近くにある村で生まれたの」
「やっぱ山の出だべ！　分かんだよ俺には！　授かり神楽は刈り入れ時後の祭りで、子供がたくさん授かるように女は腹と声を出して、男は体を傷つけるんだろっ？
　女が声出すのは、声が出ない女は家畜をうまく扱えないからダメで、腹がへこんだ女は子供が産めないからダメでそうじゃないって証明するためだろっ？
　男が体を傷つけるのは、勇気と忍耐力アピール。
　そこで結婚相手決めるって感じの祭りが山にはいくつもあって、ほとんどがこの形式なわけ、授かり神楽ってのは山の祭りでこの形態をとってるものの総称をいうんだわ。
　オレ様、山で仕事したことあるからよく知ってるわけ。
　お前山の産まれだろっ？　ならやっぱ授かり神楽だろっ？　分かんだよ！」
「そうなの？　知らない、私がいた村ではウーダンダンって言ってた」

「は？　ウーダンダン？」
「ウーダンダン」
　私は男の横に座る。
「十三歳の女が腹を出してウーって言うの、そしたら十三歳の男が焼けた炭の上でダンダンって足を踏み鳴らすの。それがウーダンダン」
　男はフードから出ている口元でにっこりと笑顔を作る。
「やっぱり授かり神楽の一種だなそりゃ。オレ様の思ったとおりだ」
　そう言うと男はマントの中からリンゴを一つ出した。
「お前にやるよ、神楽を見せてくれた礼だ」
　リンゴを私の手のひらにおく。
　もう一つ出すと自分で齧り付く。
　もしゃもしゃリンゴを食べている男を見て、手の中のリンゴを見て、そのツヤツヤの表面を親指でなぞり、口をつける。
　甘い、村で食べたモノよりも格段に甘く、柔らかく、瑞々しく、美味しかった。

◆◆◆◆

リンゴを食べ終わり、座り込み穴を掘る手を止めていたことに気がつき青くなる。
このままでは背中に焼けた鉄の棒を押し付けられてしまう。
急いで起ち上がり、つるはしを持って穴掘りを再開する。そして何遍かつるはしを振り下ろして、異変に気がつく。
おかしい。いつもならつるはしから手を放した時点で鉄の棒を押し付けられているはずだし、軍服を着ていないあの男がこんなところにいるはずがない。
リンゴに夢中で気がつかなかったが、
あたりを見回しても、
あのマントをかぶった幼い男はいなくなっていた。

次の日から異変が起きた。軍服を着た男たちが穴にやってこなくなったのだ。
いつも男たちは私たちの餌と、水を持ってくるのだが、水もなく、餌もなくなった。
最初の日はみんな穴を掘っていた、次の日も穴を掘っていた、三日目になると、みんな穴を掘るのを止め、いつも軍服を着た男たちがやってくる穴の出口に向かい歩き出した。
軍服を着た男たちがいないので穴の中は真っ暗だったが、彼らが残していったランプに火を入れ進んでいく。
私も列に続き歩いていく。
こんなに人がいたのかと思う。男も女も裸で、子供も老人も裸で、みんな足に鎖を巻かれていた。
右足と左足を繋ぐ鎖はジャラジャラと音をたて、光は二つしかないから、私の足元は見えない。
足の裏に感じる感覚は土から砂利に変わり、肌で感じる温度は少しずつ寒くなっていた。
私がここにきたときには、もう人間がいて穴を掘っていた。あれから二年たって、こんなに掘り進んだのかと感じるほど、穴は長く、いくら歩いても出口につけないように感じた。穴の中はどんどん寒くなり、ジャラジャラとなる鎖の音だけが穴の中に響く。
みんな声を発しないが、きっと逃げたいわけじゃないんだと思う。
みんな心は腐り果てて死んでいるから、逃げたいわけじゃないんだと思う。
ただ、
穴を掘れないから、
掘る理由がなくなったから、
ここを出ていくしかないんだってことを感じて歩き出したんだと思う。
私はそうだから。もう、ウーダンダンを踊っていた私と、今の私は、違う私だから。
ジャラジャラと音がして、明かりは二つしかないから足元は見えない。

　寒さは強くなり、手を擦り合わせていないと指先が痛くなって千切れそうだ。

「出口だ」

　前のほうで男に声がして、最初はゆっくりと、でも今までとは違うペース、ジャラジャラと鎖が擦れる音が速くなり、全く聞こえなかった足音が、ドタドタと走る足音が、鎖の音をかき消すように足音が、息使いが、動く音が、土煙上げヤクの群れが坂を駆けおりるように、みんな走りだし私も走った。
　そして暖かい何かを体全体に浴び、止まった。
　手で顔についたソレを拭い口に入れると、それが何だか分かった。
　血だ。

◆◆◆◆

「お前ら糞を詰め込んだだけの皮袋に教えてやるよ」
　フードをかぶった男が大きな熊？　いや牛？　違う犬だ。頭が三つある大きな犬の上に立ち金色の銃を突きつけている。
　その前に背が高い女が青竜刀を両手に持ち、出口に走り込んでくる男たちを切り刻んでいる。
「オレ様の名前はジャック！　ジャック・ラヴローだ！　死にたい奴から前に出ろ蛆虫！」
　男が叫ぶ。
「コロシちゃっていいんだよね？　ゼンブコロシちゃうよ？」
　女が笑いながらまた青竜刀で前に出る人の頭をカチ割った。
「全部殺すな愛芹！　全部殺したらお前に穴掘らせるからな！」
　女は殺すのを止めて、ジャックと名乗った男をに向かい振り返る。
「愛芹、アナほらなないよ？　アナはつっこまれるだけ」
　そしてにっこり笑うとまた私たちに顔を向け、両腕大きく広げた。
「愛芹にグチャグチャにされたくなかったら動くんじゃねーぞ穴掘り蟻！　今からＵターンして住み家に帰って穴掘れ！　お前らができるのは穴掘るぐらいだろうが！」
　そう叫ぶと金色の銃を腰のベルトにさし、最中に背負っていた大きな銃を構える。
　引き金を引く。
　私の横にいた女の頭が吹き飛び、体を縦に一回転して地面に叩きつけ、痙攣した。
「オラ！　穴の奥に戻れクソども！　今日からオレ様が飼い主だ！　働かねーと頭ブチ飛ばすぞ！」
　もう一度銃声がして、私の前に立っていた男の人が吹き飛び、私に当たり、私も転がった。
「死にたくなきゃ！　穴ほれ！　回れ右してつるはしの所までダッシュ！　ペロに追いつかれた奴は餌にすっぞ！　ダッシュ！　ダッシュ！」
　男が頭の三つある犬の耳に向かい『ＧＯペロ！』と叫ぶとペロがぐるるると唸り声をあげてゆっくりと前に出る。
「ペロ！　たべちゃいな！」
　さっき愛芹と呼ばれていた女も嬉しそうに声を上げ、ペロの背中に飛び乗る。
　ペロはもう一度、ぐるるるると唸り声をあげる。
　ジャラジャラジャラジャラ、鎖が擦れる音がしてみんなが一斉に走り出した。穴の奥に、つるはしに向かって。
　私は倒れた男の死体に挟まれ、逃げる人たちに踏まれて、起ち上がれない。ぐるるるるる、ペロの唸り声が近づいてくる。起き上れない、挟まり、起き上がれない。ぐるるるる、頭の上で唸り声がして、見上げる私の頬に涎が垂れて、真ん中の頭にある思ったよりつぶらな瞳が私を見て、「生きてるね」「逃げないの？」「逃げない人は、食べなきゃいけないんだ」「おいしそうじ

ゃないけど」「可哀想だけど」「これも褒めてもらうためだからね」「ごめんね」「できるだけ、痛くなく殺すね」「バイバイ」と言っているような気がしたので、しかたがないので、目を閉じて、食べられることにした。
　ペロの舌が私の喉元に当たり、牙先の尖った痛みが皮膚をぴりりとした時、
「おい待てペロ、その女は食うな」
　男の声がして、ペロの感触が肌から消える。
　目を開けると、さっきは遠くでよく見えなかったけど、この前リンゴをくれた男が私の目の前にいて、私の額に銃口を当てた。
「おーやっぱお前この前に授かり神楽だろ？　お前は面白いから殺さない」
　そう言うと男はペロからおり、私の上に覆いかぶさっている死体を蹴り、私の手を引き、引き抜き、立ちあがらせてくれた。
「なにやってるのジャック？　ウワキ？」
「ちげーよ！　この女は面白いから助けただけだよ！」
　男と女は喧嘩をして、私は起こされ、ペロはやはり近くで見ると愛らしい瞳ですこぶる可愛かった。
「お前オレ様のこと覚えてる？」
　男はフードを取ると、灰色の髪が現れ、真っ赤に燃える瞳が現れた。薄暗い穴の中でも分かる燃えるような赤、例えるならウーダンダンが終わったあたりから実をつけるザクロのよう、いや、ザクロの実が血を流すなら、この瞳と同じ色の血を流すだろう。
　ポメグラネイト・ブラッド。
　吸い込まれるような赤。
　私が赤い瞳に見入っていると、男が私のおしりを蹴る。
「オレ様のこと覚えてるかって聞いてんだろうが！」
　もう一度蹴られる。
　もう蹴られたくないので、覚えているのでうんうんと頷く。
「リンゴをくれた人」
「そうそう！」
 私の答えに満足したようで、男はペロに跨って、
「ついてこいよ」
　と私に命じた。
　私はペロの後に続き歩く。
　ペロはゆっくりと歩き、唸ったり、吠えたりするがまだ誰も食べてはいない。
「ジャック、もうコロそ？　ペロおなかすいちゃうよ？」
「愛芹、穴を掘らせなきゃなんねーの。一人でも生かしておいて損はねーだろ？」
「オンナをたすけるなんて、ジャック、ウワキだよ？」
「なに言ってんだ愛芹？　女も男もかんけーねーの！　穴掘らせなきゃなんねーの！　ンじゃ愛芹が穴掘るかコラ？」

「ホッテあげてもイイよ？　ジャックのアナ……」
「掘らせねーよ!?」
二人は喧嘩しながら、それでも仲がよさそうだ。
愛芹と呼ばれた女は時折ランタンに火をつけ、ペロから身を乗り出し、床に置いていく。穴の中が、明るくなっていく。
「オラ！　つるはし持ったやつから穴掘ってけよ！」
男が叫ぶ。
「コロせないの、ツマらない」
「愛芹？　お前な、オレ様が開拓したルートがあの魔法使いどもに潰されたんだぞ？　団もバラバラだくそったれ！　金稼ぐにはこの穴開通させんの一番手っ取りばえーんだ！　殺し合いはいつでもできるから我慢してろよ！」
「ほんと？　またコロせる？」
「あーほんとほんと」
男は女の頭をガシガシと撫でまわしながら私を見た。
「ほらみんな穴掘ってるぞ！　お前もボーとしてねーで穴掘れ！」
私は急いで転がるつるはしを持ち、固い土の壁に向かい突き立てる。

◆◆◆◆

　穴を掘っていて思うのは、いつもより掘りやすいってことだ。
　愛芹と呼ばれていた女がランタンを多く置いてくれたおかげで、明るくなりいつもより全然掘りやすい。
　それにジャックと名乗った男が銃を構えながら命令し、全体を三つのグループ、掘る係、土を台車に乗せる係、台車を押して土を捨てる係に分けたので、土を捨てに行くために手を止めなくていいから、いつもの何倍も掘れた。
「おう今日はここまで！　蛆虫ども！　集まってオレ様のために飯を作れ！」
　いつの間にかペロが荷車を引いてきて、そこには肉の塊と、パンと、ワインが積まれていた。
　火をおこし肉を焼く。ワインとパンが渡されていく。
「よく働いた糞はよく食って騒いで寝てまた明日オレ様のために働け！　オレ様を褒め称えて！　オレ様に跪いて！　オレ様に貢げ！　糞ども！　食って騒げ！」
　男は叫ぶと肉にかぶりつく。みんな最初は恐る恐るパンに口をつけ、そして、すぐに貪り食べる。もう何日も餌が途絶えていてお腹がすいていたし、餌ではない、食事を、人として物を食べることは何年もしてなかったから、みんな泣きながらパンと肉を食べた。
「お前ら獣か！　飯は騒いで食べろクズども！　あーそうだお前！　お前！」
　ジャックは私に銃を向けて、
「お前授かり神楽を踊れ！」
　という。
「おいコイツと同じ村から来たクズは起てコラ！」
　ジャックが叫ぶと二人の男と一人の女が起ち上がった。私たちは肉が焼かれる火を挟むように女と男に分かれ立ち、向かいあう。
　私たち女は両手でモモから腹を撫であげ「ウー」と声を出す。
　男たちは両腕を広げ中腰になり、ダンダンと足を踏み鳴らす。

「ウー」
　ダンダン。
「ウー」
　ダンダン。
「ウー」
　ダンダン。

　そして男たちが歌い出す。

わらしべ　うたう　わらしべ　うたう
うたはなに　うたはなに
わらしべうたう　うたうたう
うたううたこそ
うーだんだん

わらしべ　うたう　わらしべ　うたう
うたはなに　うたはなに
なんでわらしべ　うたうたう
わらしべこんや　わらしべやめて
わらしべうむの
うーだんだん

私たちも歌う。

おそらの　とりは　おそらの　とりは
たかくとぶ　なんでとぶ
とりはとんで　またとんで
とりとべばこそ
うーだんだん

おそらの　とりは　おそらの　とりは
たかくとぶ　なんでとぶ
なんでとりは　たかくとぶ
それはとりしか　わからない
とぶとりにきけ
うーだんだん

「ウー」
ダンダン。
「ウー」
ダンダン。
「ウー」
ダンダン。

男たちはみんな立ちあがり、足を踏み鳴らす。
女たちはみんな立ちあがり、「ウー」と声を上げる。

　私は腹を撫であげ、歌う。
　みんな声を上げ歌う。
「騒げ！　騒げ糞ども！」
　ジャックは笑いながら両手を広げ火の回りをぐるぐるまわる。
「ジャック！　愛芹のおなかがイチバンだよ～！」
　愛芹はおなかを出して妖艶に腰を振る。
　ペロが楽しそうに吠える。
　そしてウーダンダンの響きは鳴りやまないで、私は歌う。
　ウーダンダンを。私は歌う。
　みんな騒いで、歌って、足踏み鳴らして声を上げて、
笑顔で、笑顔で、笑顔で、
みんな酔いつぶれて寝た。

　起きた順につるはしを持ち穴を掘る。ジャックは一番最初に起きていて、今日も銃を片手に指示を飛ばしている。
　愛芹は、
「ジャックが、愛芹いがいのハダカ、みちゃだめ」
　といい、私たちに服を着せ始めた。
　一枚布でできた、かぶりの粗末な服だが、着ると自分が人間なのだと思いがわき、とても嬉しかった。
　ジャックの指示は的確だし、お腹いっぱい食べた私たちはいつもの五倍は掘り進めた。
　ジャックが号令を出し、女たちが「ウー」と声を上げると男たちがダンダンと足を踏み鳴らす。そのリズムに合わせてみんないつもより力強く穴を掘った。
　夜になるとみんなで火を囲み、肉とパンを食べ、ワインを飲みウーダンダンをする。
　女は「ウー」と声を上げ、男はダンダンと足を踏み鳴らす。そして私は歌う。
　みんな笑い、みんな酔いつぶれて眠る。
　そして四日間が過ぎた。
　五日目の昼過ぎ私たちは掘ることが出来なくなった。

◆◆◆◆

みんなつるはしを持ったまま立ち呆けている。
ジャックは難しい顔をして座り込み、地図とコンパスを睨んでいる。
愛芹は〝それ〟をさわって、
「こりゃ、ムリ」
と呟く。
目の前に現れたのは、信じられないほど大きな黒曜石の塊だった。
私たちが掘っている穴は高さ三メトル、幅五メトルはあるが、黒曜石は私たちの穴を全て塞ぎ、きっと全体はすごく大きい。
黒曜石はさほど固くはないので砕いて進んでもいいのだけれど、そうはいかない問題がある。
光を当てると、石の奥に、巨大な蛇が透けて見えるのだ。
「あれは何？」
ジャックに聞くと、イライラした口調で、
「ああん？　火牙血に決まってんだろうが！」
と怒鳴られた。
「カガチ？」
「そうだ、火牙血。地方じゃベヒモス、バハムート、サラマンドリア、火車なんて呼ばれる地中の燃える岩の中に住む神獣だ。
その黒曜石に見えるのは火牙血が出す体液が固まった保護膜で、その中で冬眠するんだ。
くそったれが！　帝国がこのルート捨てた原因はこれかよ！　死ねよ！」
ジャックはコンパスを投げ捨て、叫ぶ。
「みんな集まれ糞虫どもが！　今からお前らに全部話してやんよ！　なぜお前らがこの穴を掘っていて、この穴にどれだけの価値があるかをよ」

つまりは道なんだ。北側の帝国支配領域から、南側の東部連合支配領域隣接地帯に武器と兵隊と補給物資を流す道が必要だった。
南側の帝国軍に物資を送るのは、紫電山脈を越えねーといけねーわけだ。
夏の間はまだいい、狼が出て、野盗が出てそれでも何とか物資は送れる。
でも冬は雪が降るだろ？　いくらなんでも夏と同じ分だけ物資も兵も送れねーって。それで物資が減るとどうなる？　夏の間に広げた領土がガッツリ奪い返されるってわけだ。
そうして南側の境界線はいつまでたっても戦争が終わらねーんだよ。いくらでも人が死ぬ。取って取られてまた取って、両方意地だからここの戦線からは手を引かねーしな。
そこで帝国は紫電山脈に穴を掘って道を作ることにした。山一個は掘れねーから紫電山脈でも

低い青桐山に全長二キロメトルのトンネルを掘ることにしたんだ。
　お前らみたいな帝国民じゃない人間をさらってきては穴を掘らせた。
　何年も掘ってるし、かけた金だって半端じゃねーはずだ。
　でもよ、先月、いきなりこの穴掘りが中止になった。
　それでオレ様みたいな悪党に、残務処理をやらせようとした。
　つまりはお前ら残っている人間の口封じだ。
　オレ様はお前らを全員殺すためにここに来た。
　オレ様は穴の中を見て思った。
　この穴、金になるってな。

「おいお前！」
　ジャックが私を指さす。
「なに？」
「お前が俺に蹴られた日があったろ」
　頷く。
「あの日、帝国はこの穴から全撤退したんだ。
　だがよ、あと一ヶ月も掘りゃ貫通する穴をなぜこのタイミングで捨てたのか？　気になんだろうが！　んで調べたらあいつら逆側からも穴掘っててよ、先週穴掘ってたやつがみんな死んで掘れなくなったらしい。
　きっとここまで先に到達したんだろ？　それで〝それ〟に殺されたってわけだ。
　そして自分たちも死にたくねーて撤収だ。
　根性なしのフニャチンが！」
　苛立つジャックにペロがすり寄り思いっきり蹴られてる。
　愛芹はコンコンと黒曜石を叩き、
「やっぱ、ムリ」
　と呟く。
　ジャックは顔を上げて私たちを見る。愛芹は青竜刀を抜いているし、ペロは身を低くして、いつでも噛みつける体勢になっている。

　私は知っている。
　いや、ここにいるみんなが知っている。
　この穴が貫通しないと思えば、ジャックたちは私たちを皆殺しにするだろう。
　なぜなら、私たちを皆殺しにすることが、本来ジャックの仕事だからだ。
　仕事を済ませば、それなりの金が貰える。
　穴を貫通させたほうが全然お金になるけど、貫通させられないなら、殺したほうがお金になる。
　死ぬ。

殺される。
ここに連れてこられた時点で、もう死ぬことは決まっていた〝生きる〟だったけど。
腐って最後に死ぬのと、切りつけられて死ぬのとじゃ全く違う。
今、死が目の前にあり、それは解放でも救済でもなく。
ただの死だ。
穴を掘らなければ死ぬ。掘れなくなれば死ぬ。
私たちはジャックに殺される。

ウーダンダンを踊らなければ良かったのか？
ウーダンダンさえ踊らなければ、笑わなければ、食べなければ、飲まなければ、服を着なければ、私の、生きることへの執着は生まれなかったのか？
心の中で一度蘇った生きる喜びは私を容易には放してくれない。
頭の中でどうすれば死ねるかだけを考えていた私は今、どうすれば生き残れるかを考えている。
どのような死が一番苦痛がないかだけを考えていた私が今、みんなでもう一度ウーダンダンを踊りたいと考えている。
死にたくない！
生きていたい！
私はまだ笑いたい！
私は！

私は叫ぶ。

「ジャック！　ジャック・ラヴロー！　お前は悪党なんだろが！
さらって殺して踏みにじる悪党なんだろうが！
騙して欺いて奪い取る悪党なんだろうが！
ここで逃げるのかジャック！
この蛇から逃げて！　安易な殺戮に逃げて！　それでもお前は悪党か！
この蛇殺してから私を殺せジャック・ラヴロー！
蛇も殺せない小物に殺されるわけには！　奪われるわけにはいかないんだ！
私の生きたいはそんなに安くないんだ！
私を殺したければ！
まず！
蛇を殺せジャック！」
「テメー誰に口きいてんだゴラ！」
「小物のジャック・ラヴロー！　きさまだ！」
「どれが小物だゴラ！」

「きさまだ！　蛇より弱い、きさまだジャック！」
「誰が蛇より弱いってんだ小娘！　ふざけんなクソガキ！」
　ジャックが私の胸ぐらを掴む。
「あんま、ジャックをノノシルとコロすよ？」
　首に青竜刀が突き付けられる。
「ぜんぶ、コロしちゃおジャック？」
　愛芹がみんなを睨む。
「クソガキ、テメー吐いた唾飲むなよ」
　ジャックは私を地面に投げつけ、
「これから最後の仕上げだ糞袋共！　死にたくなければつるはし持って黒曜石を砕け！
　オレ様の前に蛇を引きずり出せ！」
　と叫ぶ。
　みんなその気合いに押され、一斉につるはしを持ち黒曜石を砕きだした。
「愛芹、お前はいつでも飛べるようにして壁際に立ってろ。合図するまで動くな」
　愛芹はしぶしぶ青竜刀を構えたまま、黒曜石ギリギリの壁際に立つ。
「ペロ、お前は俺の近くにいろ。俺のこと死んでも死なすなよ」
　ペロはくーんと一鳴きすると、ジャックの肩に鼻先を三つ擦り付ける。
　ジャックは床に置いてあるワインの栓を抜くと転がる私に跨り、びしゃびしゃとワインを振りかける。
　一本、二本、三本と次々栓を抜き、私に頭から降りかける。
「おいクソガキ、蟒蛇って生き物はな、酒に目がねーてきまってんだよ。
　酒の臭いがする肉が走りゃ、必ずそれを喰らおうって襲いかかる。
　お前は餌だクソガキ、蛇が出てきたら、走って逃げろ。
　分かったか！」
　餌!?　なんで!?
「ジャック！　ヘビ、うごきだした！」
　愛芹が叫ぶ、ジャックが私を引きずり起こす。
「ジャック！　ヘビ！　でる！」
　愛芹の声が聞こえたと同時に、
「キシャァァァァ！」
　と今まで聞いたことのないような金切り声が聞こえる。
　振り返ると、天井につくほど鎌首を上げた、真っ赤な大蛇が私を睨んでいた。
「走れ糞袋！　お前の生きたいを見せてみろ！」
　ジャックが私のおしりを蹴る。私は一度転んで、立ち上がり全速力で出口に向かい走る。暗い穴の中、でも暗いとか言ってられない、鎖が巻き付いた足をできるだけ早く動かして、私は前へ前へ走る。腕を振り、足を上げ、風を切り、歯を食いしばり走る。後ろから聞こえる蛇の嘶きは私の耳の後ろにある骨に響き、恐怖は後ろから手を伸ばし私の髪を焦がすがそれでも私は振り向

かず走る。体中の血液が逆流するほど熱くなり、沸騰して鼻から吹き出しそうだ、手足が千切れてバラバラに吹き飛びそうだ、息をしていないから目が弾け飛びそうだ、おしりが横に裂けてしまいそうだ、首が痛い、体中が沸きあがって辛い、痛い、もう走るのを止めてしまいたい、でも、
　私は生きたい！
　だから走るのを止めない！
「愛芹！　首を刎ねろ！」
　バン！　後ろから凄い風圧を感じて、それと共に穴の中全体が光った。
　熱い何かを頭から浴びせられ、それでも止まらず走ると、浴びせられた何かがぬるぬる滑り転ぶ。
　振り向くと、首がなくなった蛇が勢い良く血を撒き散らして、それでもバタバタと暴れている姿と、背中に眩く光る羽根を背負い、空中に浮かんで、ピンク色の髪を血で真っ赤に染めている愛芹が見えた。
「イキてる？」
　私は頷く。
「そっか、ザンネン」
　そう言うと愛芹はゆっくり蛇の千切れた頭の上におりていき、二本の青竜刀を両目に突き立てた。
　私はそれをへたり込み見ていた。
　そしてヘビの血で濡れた体に、吹き抜ける風を感じた。

　風に乗ってみんなの歓声が聞こえる。

　みんなの喜ぶ声が聞こえる。

　開通したんだ。穴が通ったんだ。ここに連れてこられて穴を掘らされ続けた生活が今、終ったんだ。
　涙があふれる。止めどなく頬を伝い地面に落ちる。私は声を上げて泣く。
　もう掘る穴はなくなった。
　穴がなくなったから、もう掘らないでいいのだ。
　私は生きてる。
　私は、生きて、解放されたのだ。
　ペロが私の横までやってきて顔を舐めてくれる。
　私はペロの真ん中の顔に抱きつき、おんおん声を上げ泣いた。ペロの右と左の頭が優しく私を舐めて、私は泣くだけ泣いた。
　泣くだけ泣いて起ち上がり、愛芹とペロと三人で穴を奥へ奥へ進んでいく。
　風を強く感じる。穴の中が生暖かく、新しく空いた穴の外が寒いからだろう、風が強く吹き込

んでくる。両手を広げ風を感じ、黒曜石に開いた穴を越え、踏んだことのない知らない誰かが掘った穴を歩き、二年ぶりに太陽の光を見た。
　穴から出た。
　一面の雪だった。
　針葉樹の先には雪が覆いかぶさり、雪は全てを白くして、太陽は全てを銀色に輝かせていた。
　跪く。
　雪を一掬いして、口に入れると冷たくて、少し苦く感じた。
「糞袋！　お前の〝生きたい〟が蛇より強かったな！」
　振り向くとジャックがいて、背中から愛芹に抱きつかれている。
「糞袋、お前は自分で解放を勝ち取り、この穴を通した。
　オレ様、このジャック・ラヴロー様がお前の名前を憶えてやる。
　名を名乗りな」
　私は名前を言おうとして、やめる。今まで名前はもう今の私に相応しくないような気がしたからだ。
「ジャック、私に名前をちょうだい」
「名前？」
「そう、名前。新しく解放された私の名前」
　ジャックは口の端を吊り上げ悪党らしく微笑む。
「分かった、お前に最低の名前をやる。
　オレ様が世界で一番嫌いな女の名前だ。
　その女はバカで、クズで、ドンくさくて、助けられるだけのカスだ。
　傲慢で、強欲で、人間が必ず救われると思ってるクソだ。
　必ず救えるって思ってるゴミだ。
　おい、お前は正義を信じるか？」
　私は首を横に振る。
「じゃあお前はなにを信じる？」
　私は自分の胸を叩く。
「私を、私の生きたいを信じる」
　ジャックは声を上げて笑う。
「いいぞ！　お前の中のジャスティスを信じろ！　お前はもう立派な悪党だ！　悪党ってのはな！　自分の中のジャスティスに忠実な奴のことを言うんだ！
　お前に名前をくれてやる悪党！」
　ジャックは笑うのを止めて、真剣な顔になり、私の瞳を真っ赤な瞳で射抜く。

「お前の名前は〝ドロシー〟だ」

ＥＮＤ

---

大間九郎（おおま・くろう）

　横浜出身・在住。第１回『このライトノベルがすごい！』大賞栗山千明賞受賞作『ファンダ・メンダ・マウス』（このライトノベルがすごい！文庫）でデビュー。他著作に『オカルトリック』（このライトノベルがすごい！文庫）等。このライトノベルがすごい、というよりはむしろ、これがライトノベルとはすごい、と言うべきかもしれない。将来的には三島由紀夫賞あたりを獲ってほしい。三島由紀夫賞のことはよく知らないけど。

## ■聖断罪ドロシー（と当誌**AIRHEAD DOROTHY**とはあまり関係ないけど）こぼれ話

『聖断罪ドロシー01』に赤黒隊の女性二名が登場する（アンナマリー・エコーとシズ・ブラッドベリ）が、初期プロットでは別の二人組（デミアン・エンジェルと雛菊）だった。ところが諸事情により変更せざるをえなくなって結果的にアンナマリーとシズの出番が早まったのだった。ちなみに赤黒隊はジョナサン・ロイド、睡蓮、デミアン・エンジェル、雛菊、アンナマリー・エコー、シズ・ブラッドベリ、リヒャルト・ゴーンドリル、菜花の八名で構成されている。睡蓮、雛菊、菜花は妖精である。

## ■妖精について

　フェアリーとは呼ばれない。第七帝国における俗称はアリス。東国（芙蓉＝現在のアリスデン州）の錬成術（アルケミー）によって生みだされた人造人間。瞳、体毛の色、均整のとれた体形、展開される羽、羽を展開すると浮きあがる刺青状の体紋など、人間とは異なる特徴を持っているので、たいていの場合は一見しただけで区別できる。生態は、「蜜」と呼ばれる液体を飲まなければ衰弱する以外、人間と大差はなく、飲食し、排泄し、睡眠をとる（ただし、人間より睡眠時間は少なく、半分ほどである）。「花のような」独特な体臭があり、体液はとくに香りが強い（妖精臭い、と言って嫌う者も中にはいる）。妖精の体液は、花のような香りがあるだけではなく、ほのかに甘い。寿命は長くなく、誕生後約２年で成熟し（この間は生育槽から出ることはない）、以後は成長も老化もしない。40年以上生きる個体はめったにおらず、平均的な寿命は24年（つまり実質的な活動時間は22年）。最長寿命は52年とされる。妖精は人間をもとに設計され、生産される人造人間だが、人間よりも効率的な肉体を持っているため、身体能力は一般に標準的な人間より高い。しかし、成熟した段階でほぼ性能が決定され、それ以上に向上することはまず望めないため、数十年かけて学習し、鍛錬を積む人間と比較すれば、究極的には劣る。知性は人間とほぼ同程度だが、大半の妖精は意志薄弱で服従傾向。とくにいったん忠誠を誓った相手には絶対服従するのが普通で、裏切る、見限ることはまずない。これは妖精がそのように作られているからである。星気面からの干渉力を絶縁する体質を生まれ持ち、魔法耐性がある。その魔法を無効化するという性質から、かつて芙蓉では兵員としても運用され、帝国の侵攻にも頑強に抵抗した。だが、芙蓉が帝国の支配下に置かれて以後、妖精の生産は帝国が管理し、多くの妖精が帝国軍で運用されるようになっている。妖精は死期が迫ると活動を鈍化させ、最終的には極小の粒子となって崩れ、その中から一輪の花が咲く。花はあっという間に散ってしまう。これが妖精の死である。

　妖精は工業製品に似た扱いで、性能に応じて等級分けされる。Ａ級、Ｂ級、Ｃ級、Ｄ級、Ｅ級、ＯＧ（オーグ：アウトグレード）、格別の妖精はＳ級。Ｃ級以下は規格品（スタンダード）で、何体（妖精を一人、二人、という数え方は通常しない。一人、二人と妖精を数える者は妖精を人間扱いしている）も同型の妖精が存在する。Ｂ級の一部、Ａ級、Ｓ級の大半は一点物（ワンオフ）。当然稀少だが、一点物だから性能が高いというわけでは必ずしもない。規格品でも生産数の少ない妖精は一点物に負けず劣らずの性能を誇るものもある。妖精の生産は帝国の管理下にあるので、Ｄ級、Ｅ級なら金を積めば手に入るが、Ｃ級以上となると、よほどの抜け道を見つけないかぎり入手、所有することは不可能。ただし、ごく少数だが、Ｓ級、Ａ級の妖精を生産する錬成師（アルケミスト）が在野にもいるという。

　妖精は羽を展開できる。平常時は不可視であるこの羽は、物質ではなく星気体（アストラル）である。妖精の羽は非常に色鮮やかで美しく、蝶の羽に似て、しかし半透明で輝き、さわると痺れるような手ざわりがある。妖精は羽をさわられるのをいやがる（逆に好む妖精もいるが、たいてい恥じらう）。妖精は展開した羽で飛翔することもできるが、非常に体力を消耗するので、飛ぶことができるのはせいぜい数十秒でしかない。また、途中で羽が消失すれば墜落する。羽が消

失すると、妖精は失神する。妖精は羽を展開すると身体中に刺青のような体紋が現れ、体紋の色はほとんどの場合、瞳の色と同色である。

妖精は定期的に蜜と呼ばれる液体を摂取しなければ衰弱し、死に至る。具体的には、体調を維持するため10日に一度、30ccの摂取が望ましいとされ、個体差はあるものの、30日に50cc摂取できなければ確実に衰弱するとされる。蜜を大量に摂取すれば性能が向上し、寿命がのびるという「信仰」が妖精の一部にはあり、日常的に蜜を摂取しつづけることで蜜依存症（蜜中毒）になる妖精もいる。一日に10cc以上の蜜を継続的に摂取すると、60日ほどで中毒になるという報告もある。中毒症状としては、惑乱、虚脱、譫妄など様々。蜜中毒によって従順で依存的な「妖精らしい」性格が破壊されることがある。蜜は琥珀色で、とろみがある。人間には無味無臭に感じられるが、妖精は甘みとほのかな酸味、芳香を感じる。蜜は錬成術（アルケミー）によって錬成され、その製法は長らく秘中の秘だったが、帝国は当然、把握している。在野の錬成師が錬成した蜜は密売の対象にもなっている。

## ■第七帝国の度量衡、貨幣、言語

　長さはメテル、重さはグロム、容積はリテル。サンチ＝百分の一、ミル＝千分の一、キル＝千倍。

　貨幣単位はダラン。多く用いられているのは紙幣。一ダラン＝百円程度の価値だと考えるとあまり外れていない。千ダラン、五百ダラン、百ダラン、五十ダラン、十ダラン、五ダラン、一ダランの紙幣がある。高度な技術で印刷（蒸気輪転機などを用いる）されており、偽造は困難。紙幣偽造の罪はきわめて重く、最高刑は死刑である。そして多くの場合、最高刑に処される。帝国が鋳造している金貨、銀貨も流通しており、紙幣はこの金貨、銀貨と定額で交換できる。すなわち紙幣とは本来、貨幣引換券であり、帝国が交換を保証しているので紙切れに価値がある。金貨と銀貨の価値は金、銀の価値と等しい。他国との交易においては、帝国紙幣が通用する場合もあるが、通用しない場合は金貨、銀貨を用いる。また、帝国内でも、高額の取引では金貨や銀貨が使われる。

　帝国語（インペリアル）が公用語。イデオグラムと呼ばれる表意文字と、アトルグラム、ルビグラム、ファルバイトと呼ばれる三種類の表音文字からなる。すべて読める者は多くないが、帝国の公文書はこの四種類の文字を使って書かれるので、官吏、公吏はこれらを習得する必要がある。ただし、公文書におけるファルバイトの用法は定型的であり、また、イデオグラムも常用字と呼ばれる約二千文字しか用いられない。通常、人名・地名はルビグラム（イデオグラムを用いる東方系をのぞく）で表記し、それ以外はアトルグラムで記す。イデオグラムがよく用いられるのは名詞である。名詞から派生した動詞、形容詞などにも用いられる。ファルバイトはアトルグラム、ルビグラムで発音できない単語の表記、とくにファルバイトを使うことが慣用となっている場合、また、強調表現の際に用いられることがある。あまり読み書きができない者も、人名などに用いられることからルビグラム、それからファルバイトの数字くらいは覚えることが多い。公教育を受けていない者の大半は、とくにイデオグラムや数字以外のファルバイトを読むことはできない。なお、イデオグラム、アトルグラム、ルビグラム、ファルバイトで、ほとんどの言語を表記可能。

## ■ていうかこれ何？

　何でしょう。何でもないような何かであるような何か。とりあえず『聖断罪ドロシー』とはあまり関係ない。仮にいくらか関係あるとしても最初に作成した設定書から引用しているので変更等もあるかもしれないし正確だという保証は一切ない。あしからず。

## ■黒女神ドナデリゼル

　かつて魔術師だったらしいが、エーテル体となって不滅の存在と化している。正確には神ではないが、神に次ぐ存在らしい。この時代、様々な方法によって永遠の生命をえた者たちは東の果ての神竜諸島に住んでいるが、彼女は退屈を嫌って世界中を漂っているようだ。求められれば気に入った者には力を貸す。しかしその代償は、すでに彼女が失った生命力だとか。

## ■ジャグラグ人

　蜥蜴人の一派。ジャグ、ジャギーと呼ばれることも。平均身長、体重は人間を越え、屈強な肉体、高い適応力を持つが、背を丸めて小柄に見せ、へりくだって巧みな話術を駆使し、金儲けのことしか考えていない根っからの商売人というのがジャグラグ人のイメージである。ジャグラグ人は装飾品を好むが、本物は身につけない、とも言われる（ただし、これは真実ではない）。多くは帝国の公民として交易商、古物商、小物商等々を営んでいるが、一部には浮民として密売に携わる者、犯罪者集団に属する者もいる。そうした者たちはたいてい非常に気性が荒く、強力な戦闘者で、恐れられている。ジャグラグ人には独自のネットワークがあり、ジャグラグ人同士が相互扶助しあうための「竜の巣（ドラグレア）」と呼ばれる組織がある。蜥蜴人の一派だが、彼らの間には竜の末裔であるという言い伝えがあり、竜の裔、竜の血を引く者としての誇りをひそかに持っていたりもする。

## ■鉄の心臓協会

　全大陸規模の盗掘、珍品・逸品・贋作の獲得・買取販売、それに付随する様々な物品の取引を手がけている秘密結社と認識されているが、本当の目的は別にあるとかないとか。協会員は大きく下級協会員（メンバー）と上級協会員（フェロー）に分かれ、メンバーは協会の真の目的を知らず、そのための活動に携わることもできないらしい。メンバーとして実績を積み、また、真の目的を探りあてた者だけがフェローになることができる。

## ■いいかげんこのへんにしておいて編集後記でも

　というわけでお送りしました愁刊AIRHEAD DOROTHY、お楽しみいただけましたでしょうか。なんとなく作ってみたら大部分が大間氏のスピンオフで埋まってしまうというていたらく。さすがに他人が書いてくれた小説だけじゃまずいだろうと、他の記事は無理やりあちこちから引っぱってきて適当に載せただけですが、もしかしたら現時点では見せたらまずいような記載も……ないかな。ないか。ありませんね、たぶん。ともあれ『聖断罪ドロシー01 絶対魔王少女は従わない』（角川スニーカー文庫）は好評発売中、『聖断罪ドロシー02 魔神と少年とかわいそうな魔法使い』は12月１日頃発売予定です。当誌はあまり関係ありませんが、是非お買いあげのうえ読んでやってください。２巻は開きなおってわりと好き勝手に書きました。１巻２巻と売れるともっと楽しく書けそうなので、宜しくお願いします。（十文字青）

聖断罪ドロシー01
絶対魔王少女は従わない
好評発売中！大？増刷決定！

聖断罪
アダムヘッド
ドロシー
Adam head Dorothy
魔神と少年と
かわいそうな
魔法使い
02
十文字 青
AO JYUMONJI
ILLUST. すぶり
角川スニーカー文庫

聖断罪ドロシー02
魔神と少年と
かわいそうな魔法使い
12月1日頃 発売!!!